

改教時報

號八十六第

◎社説 教科新設の必要を論じて、國家の任務に及ぶ……………

◎論説 佛教の慈悲を論じて、紳士の遊獵に及ぶ……………上杉文秀

◎ 生理道德及び宗教の生活……………楠龍造

◎ 臺灣の佛教(上)……………柴田常惠

◎雜録 先德餘香(其七)……………文學士本多辰次郎

◎ 泡沫録……………小魔生

◎ 人生の兩極……………佐々木月樵

◎ 遊三日誌(承前)……………悦目庵主人

◎ モルモン宗◎ 宗教法案◎ 京濱佛教徒の懇親會◎ 久我會頭山形縣巡回後の景況◎ 風俗改良會の改良事項◎ 教界彙報◎ 紛々録

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の六義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

教學科新設の必要を論じて、國家の任務に及ぶ

人は何の目的を以て此世に生れ出でたかは知らぬが、已に此世に生れ出て來た以上は、此世に對し又國家に對する義務といふものがあるべき筈である。其内に於て男子が兵役に服するとか、或は納税の義務とかいふ如き一般的の義務もある、又人々各々に異なる義務も澤山ある、併し詰りの所は、其人其人の特性を發揮して、社會の進運に向て、幾分かの貢獻をするのに外ならず、各人が自己の職業を忠實に勵めば、自ら夫が國家社會の爲になること、分業の盛になるのも、此譯である、此點から論を立て、見れば、一般の義務といふ兵役や納税の義務も、亦これに外ならぬので、男子は元來、其性質が豪放磊落剛毅といふ様な方で又体力が強い、此性質は戰爭などに適して居るから、兵役は男子が務める、又資力の大きな人が多く税金を納める、皆其特徴を發揮するに外ならぬ、こゝに譯であるから、人は我が他人に及ばぬ點があるからとて耻づるには及ばぬ、唯自己の性質に適當なる盡能を益發達せしむることに勉むるが宜ろしい、此が即一方から言へば、彼我互に長短相補ふ譯になる、世の中には何事をさして見て

政教時報第六十七號目次

- 社説
 ◎國立感化院の設立を望む……………(安達愚佛)
 ◎德川時代の救濟事業……………(前田紫洲)
 ◎女子教育と基督教徒……………(前田紫洲)
 ◎伯林より……………(前角學士)
 ◎北京通信……………(前田紫洲)
 ◎西山榮久◎宇都宮雜感(副稿呈案)
 ◎遊三日誌……………(悦日庵主人)
 ◎村上博士僧籍返還の顛末等
- 讀會
 ◎本誌廣告

本誌廣告
 一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
 一、本誌代金は必ず小爲替にて送送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無送送料

◎廣告料五號活字一行(二十七字語)一回金拾錢

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
 東京市本郷森川町一番地
 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京市本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

明治三十四年十一月三十日印刷
 明治三十四年十二月一日發行
 發行兼編輯人 百目木智徳
 印刷 清水朝太郎

も、随分遣てのけるが、一として成功しない人が少くない、藥でも萬病に適するといふ賣藥などは、何れの病氣にも左程顯著なる効能は無いものである、去れば我々は決して萬能有て一心叶はずといふ人物をば見習ふには及ばぬ、寧ろ一藝に長じて立派に成功した人こそ手本とすべきであらう、國家の場合に於ても、矢張此議論を應用しても、大なる誤謬は有るまゝと思ふ、成る程個人が如何なる學術技藝を専門とするにも、或る程度までは普通學を修める必要があること同しで、國家でも或る程度までは、一切の制度文物を發達せしむることの必要なのは、勿論であるが、其以上は此點が何れの國に及ばぬ、あの點がどの國にかなはぬなど、只管他の國に均等になること計りに骨を折るに及ばぬ事と考られる、假令他の國に及ばぬ事有らうとも、他の方面に於て勝れた點があるならば、其劣れた點を他に追ひ及ばうとするも結構であるが、又其優れた點を愈發達せしめるのは、猶更必要であると思ふ、例へば學問の事でも、東洋學などは、歐米諸國で調べるよりも、我日本や支那で研究する方が便利な場合が澤山ある、そゝの方面は西洋人の研究に任せ置かずして、我々日本人でドッシリ研究して、世界の學問界へ呈出して貢獻せねばならぬ、去れば日本の學者の任務は泰西で發達した學術技藝を習得して、歐米人の智識を吸收するばかりを勉めずして、我固有の智識を益研究して世界に紹介せねばならぬ、我佛教の如きは即其一ではあるか、我國は實に東方佛教の中心である、今日我國にある佛教の如きは

等にして、かゝる人々を去りて自利心の深いものである、古

其發達の道程を跡付けて研究するならば、昔の希臘羅馬の哲學や、近世獨逸の哲學等には、寸歩も劣らぬ、否寧ろ立ち優た、一大學說の組織が出来てあらう、これは決して我々の私言ではあるまい、殆ど三十年間發達し來て、印度支那朝鮮及我日本の思想界に培養せられ、藏經の中に納められたばかりでも、七千餘卷といふ浩瀚な書籍を有して居る、其上一寸其一端を窺て見ても、高尚幽玄な理が説てある、之を善く研究して、系統を立て、組織した日には、一大哲學を形成するといふことは、恐く何人でも首肯する處であらうと思はる、併し幸か不幸か、この大乘佛教といふものは印度より西には見出されぬ、歐米人が之を研究するは非常な不便である、彼白哲人種か何程明晰なる頭腦を持って居ても、大乘佛教の研究に於いては、我日本人には及ぶまい、此大乘佛教の研究こそは日本人に與へられた所の特長點であらう、佛教の研究は實に日本人が双肩に負ひて居る使命ではあるまいか、ソノ考へると我々は歐西で發達した科學や哲學を研究すると同時に我佛教の研究に勉勵して貰ひたい、又すべき義務もあり、する方が得策でもあり利益でもあらうかと考へる、愈此議論に大なる誤が無いとして見れば、國家は此佛教の研究には成るべく便利を與へ、勉めて奨勵せねばならぬ、そうして我日本國が世界の進運に向て貢獻せねばならぬ、

佛教研究に便利を與へるとか、我は奨勵するとかいふに付ては、種々の方法も有るだらうけれども、差當り帝國大學に於て、之を研究する道を開くのが一番捷徑ではあるまいか、

大學は固より國家に須要なる學術技藝を研究する場所、經費も最多額を掛けて居る、研究の機關も最完全に備へられて居る、此處に佛教研究の分科を設けるは實に目下の急務である、そして佛教研究を奨勵する捷徑であると言言が出来来る本會の總務員片山博士は、曩に本誌にも紹介した通り、敎科大學設置の必要を唱道して居られる、其説の根據は、獨逸の諸大學には皆神學科大學といふがあるといふのと、又博士が専門とせらる、醫學上よりいふと、現今の佛教界には種々の迷信や弊害が有て、衛生上の妨碍をすることは少なくない、併し眞正の佛教といふものは、そんな迷信や弊害の包有せられて居るもので無いから、善く研究して佛教の眞髓を會得する様に成たら、此弊害が全く除かれ無いまでも、大に減少せられるに違ひない、而して今の佛教嫌の人は概ね眞の佛教を嫌ふのでは無く、其弊害を嫌ふのである、又佛教好きの人と雖も矢張弊害は嫌ひで、佛教の眞面目を好むのであるから、専門に研究する正しく研究する大學を設けて、佛教の弊害を除き、其眞面目眞精神を發揮することは、現今の佛教嫌の人にも、又佛教好きの人にも、兩方の望みに添ふ譯であるから、詰り世人全體の希望を稱へる譯であるといふに在る、是も實に尤なる言前であるが、我々は前に陳べた様な議論からいふも、敎科大學の我國家に須要なものであるといふ結論を得る、又此一大學を設けるは、我國當然の任務であると思ふ、

然し今の日本は財政が最困難で、現今取り懸て居る事業ですら中止するとか、繰り延べるといふ始末である、敎科大學

必要は必要であらうが、今直に設立することは困難であるといふ者がある、然らば我々は難きを責めるものでは無い、出來ない相談を持ち出すも駄目であるから、一步を譲て、文科大學中に敎學科を新設することを主張する、これなれば、唯二講坐位を設けるに過ぎない、教授の二人も聘すれば事足るのである、これ位の事は如何に財政困難の日本といへども、何の苦もない譯である、

我々は佛教研究を帝國大學に於て爲すことの必要をのみ論じたか、愈敎科大學なり、又敎學科なり設けられた以上は、我神道も研究するか善い、神學も研究すべきである、婆羅門敎、回々教をも研究して可なりである、否是等の諸宗教皆研究の必要も大にあると思ふ、其理由は他日に譲て置く、

論 說

佛敎の慈悲を論じて、
紳士の遊獵に及ぶ

上 杉 文 秀

慈悲といふは、苦を抜いて樂を興へるに名く、佛は涅槃經に三種の縁を説きて三種の慈悲を訓へたり、三縁とは衆生縁、法縁、無縁なり、凡て實際の行爲は自己の能く知悉する所より推して、之を高き之を遠きに及ばざるへからず、吾人

は能く父母及び子孫に對するの情を解す、未だ能人に對するの情に厚からず、然れども已に我か骨肉に對するの行爲を推せば他人に對するの態度も亦自ら知らるゝなり、

此に於て自己存在と共に同類保存の必要を知り以て人類相互の德義を盡すに至る、即ち父に對する猶自己を思ふか如し、母に對する猶自己を見るか如し、子を思ふこと猶自己を思ふか如し、而して漸次遠く及ぼすときは、他人を見ること猶自己を視るか如し是れ恰も求心性と遠心性の相待つが如きか、自己を視ること益々深ければ他を見ること愈々廣からざるを得ず、他を視るの廣き且つ遠きは即ち自己を視るの深き且つ厚きなり、此に於て自己か生命を重むると同じく他の動物界を盡して其の生命の重きを知り、自己の苦痛を覺ゆると共に他の人類界のみならず禽獸蟲魚の苦痛を了するなり、果して然らば已に自己の離苦得樂を欲するもの何ぞ他の離苦得樂を望まずして可ならむや、若し他の苦樂を計る能はされは其は實に自の苦樂を知らざるなり、自の苦樂を感せずせば其は已に人としての知覺を失へる人なり、知覺なく感情なしとせば其は常の人にあらず病人なり、病人にあらず常人にあらずとせば其は生命なきの人なり、已に生命なくして活動すといは、其は魔か鬼か人非人ならざるへからず、願ふに世には此の精神の惡魔あり、爲に釋迦佛陀は世に出現せり、噫佛陀救世主の出現豈偶然ならむや

即ち佛陀は慈悲を訓ふるの第一階として其禽獸といはす其蟲魚といはす凡ての有情類を盡して生命を惜むもの保存生活

等はなり、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は多岐多

を樂ふものを對縁とし以て離苦得樂の慈悲を行せしむ、之を衆生縁の慈悲といふ、如斯已に他の動物界に對するの情念ありとせんか、凡ての植物界は芽を生じ莖を長し枝を茂り葉を榮ゆ、而して其の情念知覺の有無は暫く措き其の生々の状態も吾人に類す、彼れ生物に對し豈吾人の保存を冀ふの情を推して其の生存に及ぼさずして可ならむや、生物已に爾り無生物界には其の惜むべき生命無しといへども、已に吾人と同じき保存の状を見る、吾人は吾人の保存を知りて其保存を傷けることが苦痛なるものとすれば、此の無生物非情界に對するの態度亦離苦得樂の念を及ぼさずして可ならむや、此に至りて萬有界を盡して以て慈悲の緣對となす之を法縁の慈悲と名く、佛陀の訓ふる慈悲の第二階なり、次に無縁の慈悲といふは、慈悲心を起すへき立脚地に於て大に進みたるものなり凡て大乘佛教の主義とする所は所謂宇宙主義萬有神教の傾きありといふの亦爭ふべからざる事實にして、若し眞如の常住を談すれば一切眞如ならざるはなし若し佛を論すれば一切佛ならざるはなし、草木國土悉皆成佛といひ我此土安穩天人常充滿といふもの即是なり、然れば人若し絶對の境界、佛陀の知見に達するの時は一切無差別平等なり、但し此れに達するの階段としては小乗の有主義空主義、權大乘の有論空論を以て進みて實大乘の非有非無即空即假の中道論に入るものなり、此の中道の見地に達したるときは實に自己と他人の別なく動物生物の差あらざるなり、之を僧肇法師の言によれば天地與我同根萬物與我一體なり、即ち佛教の道德も進みては此の見

地に立ちて之を實際に應用するの外なきなり、若し之を解して萬物一體彼此無別なれば猶慈悲の享受者もなく能施者も亦無かるべしといはば、其は理論の一邊にして猶中道の極意を踏破せざるものなり、此れによりて能施所施受者の差別を泯しなから、能く離苦得樂の方を施すを無縁の慈悲と名く、是れ實に佛教の慈悲を説く其終局なりとす、此の三階ある中に於て小乘佛教の用ふる所は第一の衆生縁にして最も近き處にあり、若し進みて之を修めんとするときは第二第三に及ぶものなり、大乘至極の慈悲は此の無縁の慈悲にして法華經には三界は皆是我有なり其中の衆生は皆是我子なりといふ、是れ其語は衆生縁にありしといへども其意は法界無縁の見地より出てたり、されば萬物我れと同根天地我れと一體なれば何を縁するも皆平等、人と禽獸と何をか疎ばむ、人と草木と何をか分たむや、此れによりて古の大徳は盜賊の爲めに草の蔓に縛り付けられ自ら之を脱せざりしといひ、又一滴の水も尚荷且にせざれと訓えたり世に道徳を語るもの或は國家主義或は社會主義といふ、佛教大乘の至極は法界主義萬有主義といふへし、請ふ少しく細心の顧慮を煩はせ、吾人此の界に處する萬物は皆有機的組織を爲し甲乙相關し丙丁交渉す、彼れによりて此れか保存を得、此れ無くは彼れの持續を得ざるの理、纔かに周圍を顧みばまた議論を費すを待たざるなり、此の一勺の水ありて能く吾人の生命を持ち、此の一個の火ありて能く吾人の保存を得たりとせば、我れは彼に恩あり亦彼れも我れに恩あり、恩を知りて報ゆるを知らざるは禽獸に同じとい

へるを以て千古の格言とせば、水も其の用を充たすに止むべく火も其用を足すに終らしめよ、若し然らざれば水も天地に氾濫するの恐れあり火も原野を焼くの虞れあり、此の情之を萬有に施して以て怠るなきは豈吾人處世の務ならずや、此によりて世に湯水の如く使用するの語あるも湯水尙徒らにすべからず、犬猫の如く取扱ふの語あるも犬猫尙愛すべし、佛陀制戒の意趣此にありて、沙門をして肉食を禁せしむる豈唯に慾情を制するのみならずや、徒らに肉を食ふを以て僧徒を戒めず唯慈悲心を破らむを是れ恐るればなり、涅槃經に説ける九種淨肉の如し即是なり、實に是れ佛陀の慈眼は其涙を一切の有情に灑くによる亦是れ萬物同根の理に基くによる、噫佛敎の慈悲深且大ならずや、

翻て今日我邦の文明者流紳士連の行動を見るに、實に殘忍酷薄言ふに忍ひざるものあり、彼の高樓に置酒して美人の手を携ふ猶怨すへし其待合に出入して人倫を傷けんとする猶怨すべし、怨すべからずといへども彼れに對する者亦情念を解するの人類なり如かず其の對者を論さむには、然るに秋天氣澄むの時、其羽翼を伸べて、或は低枝に或は喬木に翫々として自得する彼の鳥や、原野に自由を試むる其獸や、各自性に安むして以て天然の樂報を受けむとす、人何の權ありてか其の自由を束縛するのみにあらず、此に對して其生命を奪ひ其肉を食はんとはする、予輩其精神の或は病的にあらすむば、魔界鬼界の人非人にあらざるかを疑はんとす、彼等にして若し議論の此れに對する者ありといはば、予輩は敢て論舌を闘

はずを好まざるなり、請ふ試みに其の愛兒若しくは愛妻を亡ふの時直に獵銃を肩にして彼の母子相啣むの小禽に對し見よ、論より證據思ひ半に過ぐる者あらむ、若人として此の情を解するの餘裕なしとせむか、吾人は恐る其人の家庭が如何に殘忍酷薄の修羅場を成しつゝ、あらむかを、また恐る此の人の家庭より出でたる將來の我國民は或は北清の事件によりて汚名を萬邦に流し聲價を一時に墜したる某國人に似たらむかと、

然るに彼等は亦遊獵の國民として最も尊ぶべきを聲言す、然ども予輩は想ふ、其尙武の氣風を養はんとせば擊劍柔術野試合も亦可なり、其伎を誇らむとせば射的の遊樂も亦可なり、運動を助くるにボートありボールあり、郊外の新空氣を吸はんとならば玉馬金鞍も亦妨げず吟杖散策も亦宜し、其肉を啜らばんとならば、料理屋仕出し屋に命する亦意の儘にせよ、其生活の爲にもあらず妻子を養はんが爲にもあらず、家に鉅萬の富を積み他に行樂を縱まゝにするもの、亦何の不足ありてか鳥差、犬殺の向ふを張り、此の殘忍酷薄の行爲を學ばんとする、况んや其素人技術の不熟練なる往々我が同胞を傷くるものありといふに於てをや、聞く岩崎家が一たび其の過を知りて深く其の根を絶ち、遊獵禁止の一條を其の家憲に加へたりと噫其の過は過たりといへども、其の恐るべきを悟りて範を萬世に垂れたりとせば、將來幾多の生靈を活かし幾多の同胞を誨えたるものなり、今の世の紳士遊獵の輩、深く此に鑑みずして可ならむや、然るに世の頑迷者の多き、本年九月十五

答はならず、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、房は勿論不

日々に農商務省より各府縣へ下附すべき遊獵鬼狀は實に其數無慮拾九萬六千七百拾壹枚に達し其本職の獵師の出願者は甚だ其數を減したりといふ、如此多數の遊獵者が糊口の爲にあらず生計の爲にあらす唯一時の愉快を求めんが爲に、此の惡遊戯、此の殘酷遊樂を爲すを見るに至りては、予輩感慨の涙豈澹然たらざるを得んや、予輩は斷言す、其文明流か西洋流か未だ之を知らずといへども、實に是れ物質的文明の惡弊、明治聖代の汚點なりと、今や已に遊獵の期節なり、予の寓居山林に近し、秋天晴麗の日は銃聲絶ゆることなし、大に感ずる所あり記して、江湖の諸彦に訴ふ、

生理、道德及び宗教の生活

楠 龍 造

雨露を凌ぐに家屋のあるあり、飢渴を充すに飲食のあるあり、寒暑をさくるに衣服のあるあり、目を喜ばしむるに色彩のあるあり、耳を喜ばしむるに音樂のあるあり、其他身體上の要求を充たし、生理上の必要を果たすことを得ば、此處に人間八十の生命を維持するを得、されど單に此意味に於てのみの生活ならば、全然物質的なり、草木の生活、犬猿の生活、と大なる差異を見ず、之を生理的生活と云ふ、夫婦あれば夫婦の道あり、親子あれば親子の道あり、朋友あれば朋友の道あり、政府に對する道あり、國家に對する道あり、此の如く人類相互の間に於て、善惡の二者を判定して、其惡なる行爲

をさせ善なる行爲をなすもの之を道德的生活と云ふ、宗教的生活は善惡以上の生活なり、美醜以上の生活なり、人間以上の生活なり、五蘊和合の假我を亡して實在の別天地に入るにあり、事業と云ひ功名と云ひ、學術と云ひ道德と云ひ、生老病死と云ふもの、五蘊和合の假我上の所作なり、宗教の天地に遊ぶものは、假我を因縁にまかせて假我以上の見地に住するにあり、觀音玄義に、
端坐念實相者、衆罪消滅如霜露。
實相界には罪惡なし、隨て罪惡の懊惱なし、之と同時に善なし、隨て求善の煩悶なし、「シニエライムツヘル」の絶待に依憑す。
と云ふもの、簡にして能く宗教の見地を説明せりと云ふべし、
ある人は單に生理的生活のみを有するに止まるあり、ある人は生理的生活にかぬるに道德的生活を以てするあり、ある人は宗教的生活にかぬるに生理、道德的生活を以てするありある人は宗教的にして不道德的生活を以てするあり、之を細分せんが、猶錯綜多様の分類をなすことを得て、之を要するに此三種の生活中、何つれか其一に尤も重きをおくやによりて、其人の何種の生活に屬するやを決定することを得べきものなり、今こそ生理的生活と道德的生活との二者の關係を考ふるに、其間に密接不離の關係あるをみる、
一。生理的生活を第一の目的として道德を其手段とするもの、
二。道德的生活を第一の目的として生理的要求を手段とするもの、

もの、
三。兩種の生活の間に、それが輕重を立てず、共に必要とみるもの、
第一に屬する人にありては、道德なるものは、畢竟生理的生活の満足を得るための手段たるに過ぎざるなり、我れ若し人の頭を打たんか、人また我を打たざれば止まず、若し人の所有を盗まんか、人また我所有を掠奪せざれば止まず、常に此の如くならば人々遂に安穩なる生活を見出す能はざるに至らん、此處に於てか相依り、相助け以て生理的生活の満足を得んとするに至る、道德存立の意義、またこれに外ならずとすものなり、かかる人は生理的満足と道德と衝突するに至れば、勿論道德を棄てて生理的要求に従ふに至る、今時の風潮、其行爲の倫理的行爲たるは非倫理的行爲たるを問はず、單に其成功のみを謳歌するの傾向あるは、生理的生活の満足を以て人間第一の目的となすものにあらずや、これ豈に動物的生活を以て人間第一の目的となすものにあらずや、キレネーの徒、所婆迦の人、野に市に充滿す、淺ましきかな、次に第三の兩種の生活の間に、その輕重を立てず、共に必要なりと云ふは、非角なくして圓滿の説の如くなれどもこれは兩者の間に衝突なき場合は、其差支をみざれども、一朝何れか一をえらばざるべからざる場合に際會せば、左支右吾、動く能はざるの運命に立ち至らん、更に轉じて第二の道德的生活を目的として、生理的要求を以て、其手段とするものは、第一第三に比すれば籬色鮮明見地卓然、誠に見るべきものあり、

をさせ善なる行爲をなすもの之を道德的生活と云ふ、宗教的生活は善惡以上の生活なり、美醜以上の生活なり、人間以上の生活なり、五蘊和合の假我を亡して實在の別天地に入るにあり、事業と云ひ功名と云ひ、學術と云ひ道德と云ひ、生老病死と云ふもの、五蘊和合の假我上の所作なり、宗教の天地に遊ぶものは、假我を因縁にまかせて假我以上の見地に住するにあり、觀音玄義に、
端坐念實相者、衆罪消滅如霜露。
實相界には罪惡なし、隨て罪惡の懊惱なし、之と同時に善なし、隨て求善の煩悶なし、「シニエライムツヘル」の絶待に依憑す。
と云ふもの、簡にして能く宗教の見地を説明せりと云ふべし、
ある人は單に生理的生活のみを有するに止まるあり、ある人は生理的生活にかぬるに道德的生活を以てするあり、ある人は宗教的生活にかぬるに生理、道德的生活を以てするありある人は宗教的にして不道德的生活を以てするあり、之を細分せんが、猶錯綜多様の分類をなすことを得て、之を要するに此三種の生活中、何つれか其一に尤も重きをおくやによりて、其人の何種の生活に屬するやを決定することを得べきものなり、今こそ生理的生活と道德的生活との二者の關係を考ふるに、其間に密接不離の關係あるをみる、
一。生理的生活を第一の目的として道德を其手段とするもの、
二。道德的生活を第一の目的として生理的要求を手段とするもの、

り、人には高尚なる理想あり、衣食の充實のみを以て満足すべきにあらざり、衣食以上の主義を以て、吾人の生活を律するや大によし、されど道德とは何を倫理とは何ぞ、これ唯だ人間相互の間に於ける行爲の善惡を規定し、其惡なるものをさけて善なる其行爲をなすと云ふに止らずや、されど吾人人類は人類相互の問題をさめればとて、猶ほ其上に萬有に對する問題あり、自己の運命に關する問題あり、嗚呼此の生老病死のあはれはかなき世相に對しては、如何に我心を安んずべきか、悲喜交々湧き苦樂互にあらはれ來る此社會の渦旋中に處しては、如何に我心を安んじべきか、これ宗教の天地に入るにあらざるよりは、確乎たる決定を得る能はざるなり、一度宗教の天地に入り眞の眞風光に接せんか、世相は如何に轉變するも、苦樂交起するも、恰も深淵の上層、風により波浪起るも、其根底窟として動かざる如く、身は因縁の波にまかせつ、心裡常に大智大悲の光明に棲息することを得べけん、此處に至ては、宗教的生活と生理道德二種の生活との關係を論せざるべからざる場合となり、宗教の節分と生理道德の節分とは全く特別なり、故に生理的生活の満足せる人、道德的生活の満足せる人、必ずしも宗教の門に入らず、否ならざるのみならず、財をたのむ人、徳をたのむ人は、宗教に入り能はざるなり、基督云はすや
心の貧き者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなり、
法然上人曰く、

答はなり、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたか、原はは夕前

愚癡にかかりて念佛申すべし、されど若し宗教家の眼光よりして、衣食住の如き、また道德の如きを眺めんか、まさに斯くの如くなるべし、我等學校にあらば學校の規則を守らざるべからざるなり、會社にあらば會社の規則を守らざるべからざるなり、之と同一人類社會にあらば人類相互に於ける道として倫理道德を守るのみ、之を以て第一義究竟點とするにあらざる、身體あるが故、衣以て寒暑をふせぎ食以て餓を凌ぐを要す、必ず之を以て第一義究竟點とするにはあらざるなり、これらは皆な因縁にまかすべきものなり、若し道德萬能を主張し之に束縛せられんか、天空海淵の世界を知らざる所謂道學先生ならんのみ、若し衣食力能を主張せんか、これ好んで動物的生活に墮落するもの、それが第一主義究竟點と云ふべきは、宗教的生活これのみ、宗教的生活は唯一言にして盡せば

壽命无量(Amitayus)と光明无量(Amitayus)

臺灣の佛教

(上) 柴田常惠

邦人が我新領土臺灣に對する考察は、不幸にして其正鵠を失せり、占領當時思へらく、鑛山炭坑到所之あり、鬱樹茂林伐るに從て生じ、所謂一攫千金の地と、利を射るに汲々たる者競ふて海を渡り、事を取るに當りてや、豫想は實際に反し、風土の變あり、運輸の難あり、蓬萊の島奚んぞあるべけん、なに住吉の里なるべき、生存競争は南海遼遠の孤島ま

た之あり、無謀の計は忽ち敗れ資産蕩盡し、心氣沮喪、更に思へらく、暑熱熾盛、蠻煙繁くして身を害ひ、山岳峻險、勞多くして功少く久棲の地にあらざると、歸來之を甲に語り、甲勿卒之を然りとて乙に傳へ、乙また丙に傳へ丁に成に、遂に邦人を擧げて荒山瘠土の偏隅と思はしむるに至しりもの現時の狀なり、蠻煙防々の法あり、峻險拓くの道あり、臺灣壹一に彼等の説く所の如きものならんや、先には之を過度に重視し後には之を過度に輕視す、この謬見たるは一なり。

我宗教家は如何、舉國眞を失し、或は過大視し或は過小視すの際、能く其實を窺ひ、深く布教の策を立て、此土に向ひ、敢て失敗の嘆聲を發する要なかりしか、之を雄偉熱誠なる僧侶に求むべく、之を徹底眞摯なる此徒に望むべし、傳教弘法其人なるべく、親鸞日蓮其人たらん、今日の所謂僧侶諸師に期するは不可なり初め各宗の布教を此地に起さんとするに當り、本山當路者思へらく、臺灣居住の民は支那民族なり、實にこれ我と同文の人、加るに古來佛を信し仁義を談じ、布教の便尠からず、左衽髻髮よし民心は如何に腐敗したりとするも、こは導くに其人なきが故なり、一度法幢を此間に鳴さんか、移して我信徒とし忠良の民とする難きにあらざる、我教線を弘め冥々の間統治の輔翼たるを得、信徒は獎勵し有司は歡迎す、爲さざればならずと、未だ布教の策を講ずるに至らず、たゞ將來の成果をのみ夢み、漫然僧を派して布教に従事せしむ、行く者また漠然命を奉じ、他日の効に眩んで艱難の其間に睡るを悟らず、行て教を説に及び、言語通せず風俗異り、始め

て少なからざる困難の存するを覺ゆるに至れり、徳望の赫々なく、學識の富贍なき徒の喃喃の嘆舌、豈能く俄に土民の信仰を博し得べき、古の聖僧すら滿腔の熱誠を以て、終生法を説て纔かに土人の歸仰を得、布教意の如くならざるは固より當然の事に屬す、然れども彼等は弊の己にあるを悟らず、猥に功を急ぎて成らず、失望落膽忽ち嘆聲を發して曰く、病膏盲に入り説て改むるに由なし、土民は鞭つべし教ふべからずと、當初の意氣雲の如く散じ、遂に手を土民布教より收めてまた顧みず、僅に在臺内地人の鼻息を窺ふて安逸を貪るのみ、本山當路者固より大決心を以て事を擧げたるにあらざる、一時の功名を夢みて此に及びたるもの、即ち耳を其言に傾け漸く規模を減殺して現狀の維持に汲々たるもの我佛教の狀態なり、中に或は其觀を異にする如きものあるも、此はたゞ聲を大にするのみ、殿堂を大にするのみ、布教の實狀に至ては一なり、我は斷ず臺灣に於ける我佛徒の布教は全く失敗を演し、初めは過大の功を夢み、後には前途の困難に辟易し、失望落魄遂に可憐なる土民を抛擲して顧ざるに至ると、疑ふ者は請ふ布教僧の去來頻々として席暖ならざるに徴せ、土民教化の績殆ど見なき實狀に徴せ、之失望の證ならずや、之失敗の結果ならずや。

失敗は成功の母なり、我豈徒らに各宗布教の失敗を歎むるものならんや、物質的事物はその實を得易き所、然も之すら其眞を失ふ臺灣に就て、捕捉し難き宗教風俗の狀態は固より世に知れず、爲に布教の策の宜きを得る能はず、敵を知らざる兵は必ず敗る、遂に失敗に歸したるもの敢て悲むに足ら

ざるなり、たゞ失敗の後に成功あるを悟らず、七顛八起の勇なく、一蹶忽ち沮喪し、土民の腐敗また救済の術なしとして度外視するもの、實に嘆せざるを得ず、一度難に遇ふや心氣萎靡、また起つ能はざるは、邦人の弊なりとは云へ、此の如きもの之を僧侶諸師の熱誠足すと云すして何ぞ。

言語風俗の差は、布教の上に少からざる障害たるは事實なり、民心の腐敗は幾度の設教も殆ど効なきも事實なり、然ども之が爲に導くべからずとして、教化に力めざる慈悲なきなり、教育家の本領を忘れたるなり、導くに法を以てし忍耐事に處せんか、未だ全く断念すべきものにあらざる、臺南に於ける耶穌教堂を見よ、熱誠なる信者は常に集り、其學堂は生徒頗ぶる多く、校舍整然、小學あり盲啞院あり、我嘗て該堂出身の青年數輩に接し皆共に進取敢爲の氣象に富み、態度風姿一種要すべき性狀を具ふるを觀、薰陶の功少からざるを知る、見よ故マツケー博士が淡水を根基として張る所の教勢を、神學校あり女學院あり病院あり到所會堂の設けあり、氏の一度巡回説教を試むるや、信者常にその身邊に聚集するの盛況を呈す、言語風俗人種を異にする此土に來り、多神教民をして一神教徒たらしめんとす其困難豈我僧侶諸師の比ならんや、而も尙能く此に至る、諸師の能はずと云へるは眞に能はざるにあらざる爲さるるなり、然ども其功の偉なるは、幾多の困難を辭せず辛さに苦楚を耐め終世の勞を以てして此に至りしを忘るゝ勿れ。

編者曰く、臺灣佛教の一篇、活版小僧誤りて其一半を失ふ、再び柴田君に請ふて漸く此編を補ふを得たり、事勿卒に出でたるを以て文中間々極ならざる所あり、これ尙より同君の罪にあらざる也、一言附記して同君に謝し、併て讀者諸君に告ぐ(十一月廿八日)

等はなき、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は多諸事

モルモン宗 (再)

憲法第二十八條を盾とし、他迄寛容主義を以て宗教に對する我當局者は、今回遂にモルモン宗の内地に於て布教に従事することを許せり、不幸にして吾人の言論は容れられざりき、吾人今に於て之を窮追するの要なしと雖も、吾當局者の宗教に對し頗る不熱心にして且つ放任なるには、一驚を喫せざるを得ず、一モルモン宗に對して之を言ふにあらざるモルモン宗よりも尚甚しき淫祠邪教あるにもかはらず、常に傍觀の位置に立ち、僅に行政官の手心に任して少しも顧みることなし、如斯の當局者かモルモン宗の布教を許可することは亦當然の事たらむ

當局者の口實とする所は、彼モルモン宗は一夫多妻主義を棄つるの條件附を以て、之を許可したるのみ、何の不都合かわらむやと、試に思へ、蓮門、天理の淫祠教と雖も、始めより風俗壞亂を標榜して出願したるものにあらざるを、若し彼等他日一夫多妻主義を説き、我善良なる風俗を害するに至らば、よく之を禁止するの勇ありや否や、内地に起りし淫祠邪教の蔓延を防遏する能はざる當局者は如何ぞよく外來のモルモン宗を禁ずるを得べしや、今後のモルモン宗こそ大に注意すべき問題ならむ

宗教法案

聞く所によれば宗教法案は今議會に提出せざるべしと、或は云ふ當局者は、東本願寺の財政困難を期とし咄嗟の間之を提出するならむと、よし政府の側より提出することなしとするも、各宗管長、或は有志者より建議若は宗教法の提出を見るは、稍事實に近きが如し

京濱佛教徒の懇親會

前號に報道せし如く、京濱佛教徒の懇親會は去る十一月十二日上野精養軒に於て開かれぬ、會するもの島地、村上、前田、脇田、片山の諸氏其他佛教主義の雜誌記者等にして無慮五十餘名、頗る盛會なりき、席上島地、村上、片山等の演説あり、各々胸襟を開き、互に歡を盡くして散したるは午後八時過、次會は來春二月を期して開くこと、幹事は精神界、加持世界社、大道社の三社に依頼することに決せり

久我會頭山形縣巡回後の景况

過般久我會頭の巡回は、山形縣の佛教界に大影響を及ぼし、同縣東置賜郡高畑町にては、本會の支部を設立せんとて、同地の有志者

- 山形縣東置賜郡高畑町貞泉寺住職 富樫 謙 忍
- 同 山形縣東置賜郡高畑町貞泉寺住職 岩 船 謙 覺

欣躍の至に堪へず、聊詹言を陳して之を辨すと云爾

明治三十四年十一月朔

大日本佛教徒同盟會總務委員 本多辰次郎 識

又同郡の北條郷、宮内町、赤湯町、沖鄉村等合同して、別に支部を設立せんとて、目下右の高橋禪龍師始め、有志諸氏奔走中なり、又最上郡の新庄町に於ても一支部を設立せんとす、有志者運動中なりと、且福島、宮城、岩手、青森等諸縣よりも會頭の巡遊を請求し來れり、

きく所によれば、高橋禪龍師は年來布教に盡力し殊に今回久我侯爵同縣下巡遊の節頗る斡旋の勞を取りたるを以て曹洞宗本山永平寺管首より左の賞状を賜はれり

平素布教に精勵し其普及を圖るや切なり、殊に這回久我侯爵の其地方を巡回せらるゝに至らば、國家の幸福之に過たるはなげん、其善行洵に嘉すべし、向後猶益々不遺轉に住し宗風の興揚に努むべし、依て茲に安院會一層を授與し特に賞詞に及ぶ

明治三十四年十月十四日

大本山永平寺

風俗改良會の改良事項

風俗改良會が此頃決定したる改良事項左の如し云ふ、此項目にして追々實行する、に至らば、國家の幸福之に過たるはなげん

- ▲訪問の際は談話は冗長に渉らず時間は短少なるべし
- ▲訪問には名刺を出し面會せざる時は之を遺し置へし
- ▲訪問者には茶菓を出さざるを通例とす
- ▲業務上の訪問には餘事を語らざる可し
- ▲訪問者の名刺は白色の紙質を用ひ裝飾を附す可らず

- 同 金藏寺住職 伊藤 禪 峯
- 同 松岩院鑑住 菊池 興 禪
- 同 和村村清林寺住職 富樫 謙 眠
- 同 龜岡村西來院住職 飯坂 耕 雲
- 同 村露藤安松院住職 漆山 全 杲
- 同 同 村入生田圓福寺住職 高森 龍 山

の諸氏發起となり、運動中にて、右總代として、沖鄉村の高橋禪龍師過般上京して、本部に來られ、諸事打合せの上歸國せられたり、而して其趣意書左の如し
佛は暗きを照す光なり、苦を抜き樂を興ふる方なり、病む者に藥を興ふる醫王なり、腐敗せる社會を淨め、枯渴せる心田を濕すは佛の心なり、睽離し衝突する我等を和合せしめ、父子、君臣、夫婦師弟、朋友互に報恩の心に住して各其宜きを得せしむるは佛の教なり、此佛心を體し此佛教を奉して墮落し腐敗せんとする今の社會を救済し、輕薄に赴かんとする風俗を敦厚ならしめ、徳風を四海に微動せしめ正氣を八表に充實せしめんは、我輩佛徒か佛陀に對し又社會に對して當然盡すべき任務なり、然れども斯大任を遂行せんとならば、宗派の差を論じ、縋索の異を立て、郡國の別を云々するが如きは最不可なり、是等諸種の差異を見ず、鴻溝を設けず、各宗共に同盟し縋索互に一致するは目下の急務と云ふべし、我大日本佛教徒同盟會は此必要に應じて起れるなり、今や山形縣東置賜郡の有志諸君は我輩と志を同じくして、茲に同盟會支部設立の擧あり、我輩此報を得て

等はなほ、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

▲訪問を受けた時は勉めて速かに面會をなし徒らに其人を待たしむることなきべし
▲人と對話するに野卑の言葉を用ひざる様注意すべし就中猥褻の事は堅く之を慎みべし
▲文章演説對話に於て人の氏名を呼捨せざるを善し
▲社會共存の義に由り他人の妨害をなさざることを留意すべし、之を例せば▲道路の通行には左側を通行人道車道の區別ある場所にては必ず人道を取るべし▲途上に於て車馬又は歩行者を道越さんとする時は必ず其右方に出つべし、又後方より發聲を掛けられ之を避けんとする時は必ず左方に於いてすべし▲途上に佇立し立談すべからず▲途上に出来事ある時其場所を避れ通行の妨害をなさざる様心掛くべし▲幾て人に接し又は戸外に出つる時は耳若し衣服をなさざる様注意すべし▲途上又は船車中に在りては容姿を端正にすべし船車中に在りて無作法なる態度をなし座席を廣く横領し或は酒宴に似寄りたる事をなし總て他人の迷惑を省みず我儘の行爲あるべからず

▲渡船場乗車場にて先を争ひ混雑せざる様注意すべし
▲劇場寄席等にては極めて静謐にすべし、多人數集會の席にて濫りに私語をなし新聞の音讀等をなす可らず
▲老幼婦女に對しては及ふべきたけ力を添へ之を扶助すること心忘らべからず
▲公衆の眼に觸るゝ場所に設置する時計は努めて其時刻を正確にする様心掛くべし
▲回答を要する文書に對しては努めて速に返事すべし
▲案内狀は成るべく一週間に前に送るを善しとす
▲酒杯の献酬を廢止すべし
▲酒席の飲食物は其席に於て飲食する者に止め總て客人の持送り又は其家に送り届くる者なきを善しとす
▲虚飾無用の物品贈與を廢すべし
▲葬儀の際に煩瑣なるを要す、葬儀の節、生花、造花、放鳥等の贈物を爲さざるを善しとす、會葬者に飲食物を弄出し又は其服者、馬丁、車夫等に飲食物金錢等を交附せざるを善しとす
▲旅店其他の茶代は一切廢止せしむる事を勉むべし

◎要するに空濶布教の方針を一變するにあらざれば、成效を見ること甚だ難たかるべし
◎臺灣の奢侈の風盛なるに甚しきものあり、試に一例を擧げんか、下婢の如き卑しきもの之を幾も惹き買ふ尙腕車に乗ると云ふ有様なり、其他は推して知るべき也
◎去月十七日勢舟君の郷里に歸るを新橋停車場に送りぬ、演説一聲、列車は徐々として進行しゆくや、「新佛教」の波水君語りて曰く、舊佛教を擧り去りぬべし一同手を拍つて哄笑す、蓋し勢舟君は常に舊佛教を以て任したれば也、波水君は加藤文學士にして、勢舟君は即ち眞岡文學士なり
◎人を知るもの多し、己を知るもの至ては眞に稀なり、怪む勿れ、傲慢の人、不遜の人多きを

雜錄

先德餘香 (其七)

高陽生

●風景、頼朝、大旭三師、本願寺と増上寺と宗名争の事は、徳川時代に於て宗教史上の大事事件である、けれども自他宗の人皆其史實を知らないで居る、僕も詳細な事は知らぬから、追て研究することにして今は大略の其又大略を書き付けやう、扱鳳景は羽後の坂田に生れた人で、江戸淺草本願寺地内光圓寺に住職して、號を東海と呼び、東本願寺の講師職に上り、五乘院とて有名の學匠である、頼朝は矢張本願寺地内の徳本寺住職で、大旭は宗恩寺住職である、明師の長する所は計畫の才に在り、旭師は最敢爲の膽に在り様である、此處に學識才略膽力具足したのである、此三人力を彘せて不惜身命の熱誠を以て事に任じた、内外に敵を受けながら、大局に於て贏

等はなき、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

教界彙報

◎在河乙の文學士近角常親、池山榮吉の二氏は、來年八月頃多分歸朝せらるならん
◎本派本願寺は兼て北海道の布教に着眼し、大谷派に於ては去年一年渡島國檜山郡鶴村に二百六十八町歩の地を借受け學田として開墾をせし居る事なるが、本派に於ても此度學田に供する爲め千五百坪の地所貸下を出願し、新法主大谷光瑞師の歐洲より歸り大谷光瑞師を同地に移住せしむる計畫ありと云ふ、鶴門徒たる富山縣の長老議員島武右衛門等も移住の答なりと云ふ

◎希服の首府アゼンヌに於て、聖書を近所の希服語に翻譯せんとする計畫に對し、大學學生は右は聖書を讀すものなりとて之に反對し狂暴なる騷擾を惹起し賛成派の新聞社を攻撃したる後大學に歸り、鎮靜に向ひし警官及び兵士に向つて發砲し、即死七名百傷三十名を出すに至れり
◎大谷派本願寺に於ては、財務整理に伴ひ、寺務所職制を改正し、庶務部統制部を廢止し、新に監獄科庶務科を設きて之に隸屬せしむるとしたる結果、此程寺務役員の変更を行ひ、元統制部長、監獄部員は北海道寺務出所所長に、會計部員事務深澤誠同、庶務部員野村凌空同部員藤井雄の三氏は、北海道寺務出所所長に、元庶務部長和田圓什師は管宿部管宿に任せられ、又庶務部長は北海道事務所長平野龍吉氏監獄科長は松岡秀雄氏就任せられたり
◎各宗派の管長會は本月二日頃より、京都洛北龍泉庵に於て開き、覺王殿建設に關し専ら協議をこらす由

◎曹洞宗の今議會に於て決議せし、經常歳出費は總計金貳十四萬九千六百四拾貳圓九拾四錢なりと云ふ
◎臺灣に於ける布教の効力漸らざることは今更の事にあらず、布教者は全く内地人の葬祭を司るのみにして、土人布教の如きは措いて問はず、是を以て從來臺灣佛教の狀態を知るもの殆ど稀なりと云ふ
◎かゝる布教者に各宗の本山なるものか相當の俸給をあたへ、其外多額の布教費を費すに洵に無用の事たり、彼等は假令本山より俸給を受けずとすも、實に判任官以上の收入ありといふ

紛々錄

ち得た所の有たは尤の事である
●淨土眞宗 といふ名は親鸞上人が専ら稱へたので、折々は法然上人の開いた淨土宗の事も淨土眞宗と呼んで居られる、併しソノ事と勿論親鸞上人が法然上人の正統を襲いで居るといふ議論になる、兎に角淨土眞宗といふ名目は親鸞上人流の宗旨の名たること今日では定たが、以前には諸藩の公文などには或は一向宗或は本願寺宗など稱して一定して居ない故不便の事が多かつた故、安永三年八月兩本願寺の門跡より、江戸輪番をして、幕府寺社奉行松平伊賀守忠濟に就て、向後本願寺は總て淨土眞宗なる本號を公稱して他名を用ゐることなからしめんと請願せしめられた、すると幕府では之を當時幕府の香華院たる寛永増上の二寺に諮詢した、申すまでも無むが徳川時代に天台淨土の二宗が威張たのは非常なもので、善光寺を大勸進大本願と二寺で支配するに至らざる其現象である、淺草觀音を天台宗に附屬せしめたも其影響である、寶曆の頃親鸞上人五百回遠忌に當て、聖人に大師號を賜らんとせしを天台宗が故障を申立て、沙汰止みと成た事も有る、今度の宗名一件に就ても、増上寺は果して故障を申立て、曰く、淨土眞宗とは我宗號である、已に昔應永十五年以後小松天皇より等熙國師に黒谷金戒光明寺へ淨土眞宗最初門の勅額を賜たのでも明かである、他門に於ては決して此宗號を用ゐる謂れなしと、此時幕府に至て政柄を握て居たのは、三百年間に最極陋劣奸邪な政治家田沼意次で有たが、増上寺と如何に結託したか、寺社奉行太田備後守資言をして増上寺に對して、

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたか、原因は勿論利

本願寺の宗統は幕府に於ては一向宗と定めて、決して浄土真宗とは名乗らせざるを告げしめた、本願寺は之を知ら無たが増上寺が未寺に此事を布告するに至りて、事面倒と成た、當時西本願寺は三業惑亂の騒で疲れて居たか、夫程で無かつたが東本願寺の方では乗如上人は直ちに使僧を江戸に遣し幕府に就めて事情を分疏せしめたが、一旦田沼が増上寺に指令した事でもあり、幕府香華院の威光は飛ぶ鳥も落さんばかりであるから、兎角不得要領の四字の下に空しく十有餘年を経過した、天明七年に家治將軍も薨去せられて、田沼の悪運も傾いて松平越中守定信が幼少なる家齋將軍を輔佐するといふ事になった、此候は申す迄もなく近代の名宰で從來の弊政はドシドシ改革せられる、其處で殆ど泣き入りと成て居た宗統問題も持上た、幕士鳴島忠次郎といふが宗恩寺大旭と親密で有たから、一日旭師に向て條理を訴へて論争すべきを慫慂した、旭師奮然として起ち、景旭二師に謀りて、我れ死せん公等幸ひに良策を授けよと、そこで當時上京中の白川侯歸京の道に駕を要して闕訴する事に一決して、景旭二師は訴牒を懐にし出發した、朝師は生きて善後の任を引受けた、天明八年六月廿五日白川侯定信函嶺の嶮を通過するに當て、駕前に跪いて訴狀を献する一僧が有た、此二僧は言ふまでもなく、景旭二師である、嗚呼越訴之れ幕府の嚴禁する所、此闕訴に由て嚴刑酷罰を受けた例は珍しくない、佐倉宗吾も其一人である、當時二師の胸中は如何で有らう、爲法不爲心とか、不借身命とかといふ熟字はコンナ人の形容詞であらう、併し白

川侯も賢相である、田沼の後を承けて弊政改革を期して、常に民情疏通を心懸け、冤枉を伸雪するを以て任とした人である、侯が門に一夜大きな膏藥を貼り付けて居た者が有た僕が之を剥ぎ取んとするを制して、侯は、其下に上か下か痛み何れに在ると書き付けさせた、すると其夜又人が有りて近代の出来物と落書して行たといふ佳話も存する人であるから、二師の訴狀を受けて徐に小田原の旅舎に着して、臣をして二師に曰はしめて所願理ありと雖も、之余が關する所にあらざれば、道を以て寺社奉行に請ふべしと、二師乃ち寺社奉行に訴へやうと思へども、當時の制必ず輪番の副書を要するに、輪番は斗筲の小人にて、三師の功を成さんことを怠みて副書を與へぬ事は知れ切てるから、又寺社奉行に直訴と決して七月十二日寺社奉行牧野備前守忠精に途上闕訴した、依て忠精論ずるに輪番の副書を得て例規によりて請願すべきを以てして、二師を輪番に引渡した、輪番大狼狽して、急に本山に使を立て、二人闕訴の罪を具申して之を禁錮せんと請うた、其陋劣さ加減寧ろ憐むべきではないか、依て朝師は二師を上京して、事情を宗主に上申せしめた、宗主は師等の哀情は諒せしもの、却て宗主も之を知た以上は、闕訴の罪を放置する譯にも行かず、自坊に歸りて謹慎せしめた、是より輪番等は百方羅織して與黨として寺に幽閉する者十餘ヶ寺に及んだ、三師は固より死を決して闕訴せし者、固より罪を避くるの意は無いが、去りて輪番等の手の下に空しく寺中に幽閉せられてゐるのは心外であるから、三人密に謀りて、又々寺社奉行に越訴と

めて、密に寺を出で、忠精の邸に訴へた忠精温言之を慰籍する計りであるから、三人も失望して、今度は定信に訴へて増上寺の僧と對論せんと請うた、是も許されぬ、闕訴二十餘回に及んだが取り上げられない、乗如上人も又幕府に請ふ所ありて、幕府も捨て置かれず、翌寛政元年三月十八日老中及寺社奉行立合の上で、本願増上兩寺の僧を召して、宗名復舊の件は事重大にして容易に判決すべからず、公文は總て舊例に據ることとして、二寺相争ふことを禁した、そこで田沼時代に増上寺へ許した浄土真宗なる宗名も全然取消に成た、此時輪王寺宮が仲裁に入つて三萬日の後裁決を與ふべしと二寺に達せられた、そこで一段落付たが、輪番等は深く三人を惡みて、幽閉中擅に越訴したのを罪として、頼朝を三河國野寺の本證寺に、鳳景及大旭を淺草別院に幽閉した、景旭二師は間もなく許されたが、朝師のみは教唆の罪大なりとて、僧官を褫奪せられて、禁錮二十三年の後漸く歸寺することを得た、其後物替り星移り幕府も倒れて、明治の新政府となり、明治五年三月十二日、官本願寺に令して真宗と稱することに決した、これが寛政元年を距ること八十四年で日數に直して見れば、恰も三萬日とは又妙では無いか

泡沫錄

臆病、る犬は吾影を見て吠ゆ、小人は狼に他を付度して以て怨みに思ふ、臆病の犬は尙ほ憐むべし、小人は遂に教わが

小 魔

等はなき、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

(二)

偽善者は問はずして自ら誇る、信あるもの必ずしも言はず、義あるもの必ずしも語らず、自ら誇らんより吾は黙々の人たりむ哉。

(三)

鞍上人なく、鞍下馬なきに至りて、始めて達人を謂ふべし、彼の絶対の境に入り無畏の天地に遊び、我なく、執なく、迷なく、妄なき者に至りて、始めて宗教の人たるを得む。寧ろ宗教の妙味は茲に存せざらむか。

(四)

一、死唯萬事休矣、擾々たる毀譽褒貶、何ぞ畏るに足らむや、畢竟芳名何物を、醜聲何物を、一杯の土死屍を横へ去りて、俗論群議亦何處にかさくべき死者罪なし、言ふもの却て罪あり。

(五)

矛盾を惡むものあり、思ふ矛盾は吾等の本性にあらざるか、を、まのわたり之をほめて隘口を叩くもの、内心理を思ひつ、陽に之れを排斥するもの、これ矛盾にあらざるか、友を賣る善人あり、國を賣る愛國者あり、これ矛盾にあらざるか、安心を得ずして導き、立命を定めずして教えんとするものあり、これ矛盾にあらざるか、朝に東に往き夕に西に奔るもの亦之れ矛盾なり、滔々たる天下何物か矛盾ならざるはなけむ、矛盾と表裏はこれ人生の常、何ぞ怪むを要せむ。

双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

人生の兩極

佐々木月樵

誰でも此世をば、苦痛の中に暮して見たいといふ人は、恐くは一人もあるまい。十人が十人、百人が百人、他人のいふとに、必ず反對するといふ根性の人でも、吃度賛成するとは、安樂に此世を暮して見たいといふものである。

所が、實際上からいへば、此世を安樂に暮す人が甚だ少ないのは、是れ一の不思議である。今日、極々、樂みさうな暮しをして居る人も、實際の人はさうして見ると、さうも樂しくないといふ。さうなれば、御互に此世を安樂に暮したいといふとは、唯是れ一種の空想か或は妄想到すぎないのであらう乎。けれども、さうとも思はれぬ、何せなれば、古來から、隨分、世間には見捨てられ、社會からは放逐せられ、一生を逆境の中にすむした人でも、悠々天地を樂しみ、一生涯安々と終つた人は澤山ある。然らば、一生を安樂に暮したいといふとも、必ずしも空想でもなければ妄想でもない。反て、今日御互に、富貴になり、世にもてはやされ、人に重寶がらるる様になれば、安樂に一生を送ることが出来やうなぞ、思ふのが、大なる空想又は妄想であるかも知れぬ。

思ふに、御互がすむ地球に、兩極がある如く、人生には常に苦樂の兩極がある。もと、苦樂は全く反對性のものであるも、常に相伴存して居るものである。是れ單に苦樂ばかりでなく、善惡、長短、吉凶、禍福、貴賤、憂喜、愛憎、その外一切凡てのことが、皆なさうである。極々、手近い所で申しま

すれば、一筋の繩の上にも、罪人は是によりて苦み、輕業師は是によりて樂しく世を渡る兩性を有して居るではないか。醜素は人を殺す性質もあれば、醫者の匙にかゝると、その儘人を活かすの性質を具して居る。つまり、如何なるものにも、兩極を有し、表裏がある、錦の織物も、裏から見れば、見られたものではない。この世界も、苦樂の表裏があり、人生にも、必ずこの兩極があるから、苦の方面から見れば、この世界も苦の世界である。然し、樂の方面から觀察して見る時は、人生も隨分樂しきものである。要するに、人生は、常に苦樂の兩極を有するものなれば、我心の持ち様次第で、苦しくも、又樂しくも暮すことが出来る。

先づ、富貴と貧賤とに就て話して見やう。たとへば、人々貧乏すると、徒らに富貴の人をうらやみ、わが貧乏の中にも樂の一方面があることを忘れて、我と我頭を苦の一方に而已つて、非常に苦悶する人が多い。これは全く至らぬ人である、か様な人は、若し幸に富貴になればとて、恐くは一生涯苦痛より脱離することが出来ぬ人である。たとひ、如何程貧乏でも、現に貧乏の中にも、苦樂の兩極があれば、我心を樂の一面にさへ安すれば、隨分一生を富貴の人よりも樂しく送ることが出来るものである。世界第一の富豪家コックヘラーの娘と生れても、思ふものが何でも得られるから樂しくないの不足があり、彼の有名なるカーネギーでも、今日現に自己の財産の分配法に就ては、非常に苦心して居るではないか。如何に貧乏なりしと雖も、顔回は陋巷にありては、其樂みを改めず、ダイオセネスは、天下の富を有せし人よりも、樂しく、我一生を小さき桶の内に送つた。然らば、人生は、

金銀財寶山程あつたとして、苦の極面に頭をつき込みて苦むよりは、寧ろ貧乏にても、樂の極面に我心を安んずるが、これ程、幸福であるかも知れぬ。世間の人は今日は、金の時代である、富貴になれば、必ず安樂にこの世を送ることが出来る様に考ふるが、これは大なる間違ひである。如何に貧賤でも、貧賤には、貧賤の樂みがある、人に損かけらるゝ心配もなければ、盜賊の世話もいらぬ。思ふが儘に得られぬの樂みがあれば、「財産の分配法」に頭をやますともいらぬ。如此、貧賤にあつても、我貧賤に安んずれば、遂には、あゝ實にありがたい、我天命の貧賤といふ妙樂の境に逍遙することが出来るものである。

善惡邪正といふやうな事に就ても、また、さうである。世に惡人といふ人も、一方には必ず善の方面を有して居る。否な、善の方面を有して居る位でなく、能く觀察して見ると、大惡人が其儘大善人と感ずることが出来る。提婆は佛敎の大敵、阿闍世王は、無二の大惡人として、古來の佛敎徒には常に引用せられて居る人である。所が、我宗祖親鸞聖人様の眼から見ると全くさうでなかつた。古來の人が佛敎の大敵である、無二の大惡人であると觀じた提婆、阿闍世は、我宗祖の眼から見ると、彼等は、佛敎の敵でない、味方である。惡人でない、善人である、尙ほそれ位でない「然れば則ち淨邦縁熟して、調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機彰はれて、釋迦韋提をして、安養を選ばしめ玉へり、是即權化の仁、齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆誘闍提を惠まんと欲してなり」。我宗祖は提婆阿闍世を權化世雄の人達であるとまで申された。かく口で申されたばかりでない、日常の

行動、常に此見地にあつた。是の故に、一たび罪なくして流罪の宣告にあふも、怨む所か、なげく所か、反て「抑又大師聖人空若し流刑に處せられ給はずば、我又配所に趣かんや、若し我配所に趣かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是尙は師敎の恩致なり」と、此時に於ける宗祖の心中如何にぞや。菅公の事は、此頃世間で八ヶ間敷やうであるが、あの人が流罪後既に一年もたつても、尙ほ清涼殿上の事を夢みて、斷腸せられたる心底に比すると、實に雲泥の差を申さざるを得ない。こゝが宗敎を信する人と信せざる人の違ふ所であると思ふ。佛敎は苦の極面になやむ人を樂の極面に導き、苦の世界を樂の世界と變せしむるの敎である。たとひ、佛敎には厭世苦痛の關門はあつても、一たび、關中の人とならば、光風晴月、安樂の天地に逍遙するとの出来る敎である。

「宿かさぬ恨みもはれて野邊の月」。人生五十年の行路中には、雨もふらう、嵐も吹かう。御互に世間に見捨てられ、社會から放逐せらるゝ時もある。うればかりでない、都合によれば、父母妻子にも見離され、親戚故舊にも嫌はるゝ時があるかも知れぬ。が、人々平生から人生の兩極を味ふて居たらば、この時、決して世もうらまねば、人ををもしらぬ。もだえもなければ、苦みも起らぬ、何せなれば、直ちに苦の極を離れて、心を樂の極に安んずることが出来る故である。旅に出でて、宿断はられて餘儀なく野宿せねばならぬ時は、一時は、誰でも、腹も立たう、怨みもしやうが。さて、野宿したので、得もいられぬ野邊の月がながめられたと思へば、怨む所か、反て断はられたればこそ、心底から難有感するところが出来るものである。

等はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古 双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

讀者之天地

遊三日誌 (承前) 東京 悅目庵主人

五日午前六時半比善友會の説教二席を勤めて此會の市はサカへたか此地に住居して此會に盡瘁して居る内田錠之助といふ人が有つて自分の履歴談を述べられ(茶話に)たか余も聞て感概の念を禁じ得なかつた

私は東京赤阪の出生で早く兩親に死別しまして兄弟も姉妹も有りません夫で兵隊に出る時にも留主番も無いといふ有様で何とも仕方有りませんから地所家屋から公債證書まで残らず近親の者に保管して貰ふことに任ましまして、夫から兵役に服しました間もなく西南戦争となりまして出征しましたが無事で凱旋して遂に除隊されましたソコから歸京して近親とも相談して預けた地所や公債を賣却して一商法に有り就ふと思つて歸りて来て見ると田地や公債も残らず賣り拂つて仕舞つたといふ譯で而して其金はツイ遣つて仕舞つたと斯う言つて澄し反つて居る始末で實に其時は憤懣と落膽で喪心しなふて有りましたが何を言ふにも近親では有り夫に預り物を牛氣で吹き賣る様な人物ですから彼は言つても始まらないと断念しましたか、所で資本は失ひ夫に親族でさへ斯んな怖ろしい事をする大都會に住ふより寧ろ片田舎の質朴な所に移住して自ら却て安穩に一生を了する事も出来よふかといふ愚考で或る知己の誘導もあり傍此地に先づ永住する事に決定しました此地は不自由では有りますが東京の様な大都會に比べますと實に人間が淳朴であります今日が常所の人々の推薦で私も那役所に勤めて居りますが全郡中一悪人は無いと云つても善い位で有ります今日が都會になれば成る程道義も地に委する様な懸梅ですか此儘で押し行つたら文明の進歩程道義が無くなつて遂に滿天下が腐敗して仕舞ふだろと思ひます夫といふも先入主となるの道理で小兒の時代から道徳の重ん

すへき事を聞かせて置たら善いと思ひますのに今日の教育は唯智識の一邊に片寄つて居りますから自然成長の後に道徳杯は顧みない様になるので有ると私は存じます夫故私も考へまして近頃當村に少年教會を設けて六歳以上の兒女を折々集めて道徳の談話を致して居りますか何自分一人では出来兼ねますから時々住職方を講師に招聘して小兒に適當なお談話を願ひますかサテ中々何事も思ふ様には參らね者て……ハハハ私か宗教を信する様に成つたのも不思議で實は私は宗教は少い時は大嫌ひて御寺を見ても僧侶方を見ても胸が悪くなな位で夫ですから頭で説教なを聴たことも有りませんでしだが前年尾張の名古屋別院で軍隊説教が有つた時御役目で據るべく參りました所が劉某といふ人が説教をして居られましたか其人は昔し私を教育して呉れた人で其人が佛教に入つて而して説教までする所を見ると何か佛教には善い所が有ると見えると斯う感じが起つて見ると頻りに聞て見たく成つて夫から久瀨で其人に面會して種々談話をして夫が根本に成つて遂に宗教の必要を感じて今日では及ばず乍ら宗教を知らるゝ人には少しづつ道理らしい事を考へて言つて見るといふ様な工合で……ハハハ子供ですか子供も三人あります長男はモ一中學へ遣入つて居りますが是はドウか一人前にして祖先の名を辱かしめない様に仕度と思ひます……此談話を聞て余は東京人種で有るから云何ふも漸汗に堪はなかつた都會の腐敗して居るとは毎々新聞雜誌にも言ふことであるが實に是からは東京人であるといつて田舎で成張る事は決して出來ない

本誌購讀者諸君へ
本會歳末の決算上の都合有之候に付、本誌代未納の諸君は此際大至急御拂込被成下度此段殊に御依頼申上候
一、端書を以て御催促申すも、其た手数を要し煩しく存候
四月 理事 御洞察の上宜敷願上候
大日本佛教徒同盟會出版部

江村秀山師著

村土佛教統一論始評

全一冊

定價拾五錢

村土博士の佛教統一大膽な大乘非佛説の意見が公表せらるゝや、論難の聲益高く、破法の論が發せられ、其大膽な一大汚點を印現せしむるべし、蓋し之れ教海近事の大波瀾と云ふべし、明治佛教史上一大汚點を印現せしむるべし、本書は教界の老将、江村秀山師が、獨得の見地に立ち統一論の論目に対し、確實なる考證の下に、解決を與へた論鋒銳利、批評精確の諸士必す之を一讀せられよ、關西佛教青年會編纂

第十回夏期 佛教講習會 佛敎講習會

全一冊

定價三十錢

北勢四日市の海濱に於て七月十五日より二週間に亘り開設せられたりし本歳の夏期講習會には各宗の高僧碩徳の出演せられたるもの二十餘名、實に空前の盛況を呈せり今その講演を悉く筆録して本館より出版せり今日若し之を讀まば白沙青松の間に親しく其高論卓説を聴くの感あらん

目次
信爲能人、智爲能度
般若心經略讚
佛敎道徳の大意
世尊陞座銘
俱舍論の因果律
摩訶般若波羅密多心經
眞宗教旨
三祖鑑智禪師信心銘
涅槃經二十四卷高貴德王品六
三藏經結集の異同及年時
浄土宗大意

赤松谷 大連 周城
神谷 大連 周城
齋藤 唯大 周城
日置 唯大 周城
山内 唯大 周城
林山 唯大 周城
蘆津 唯大 周城
加藤 唯大 周城
藤島 唯大 周城
神藤 唯大 周城
神藤 唯大 周城

眞宗大意
佛敎大意
眞俗二諦
天台大意
淨土無生論
普勸坐禪儀
老耆考論
精神主義
日本佛教の特色

江村秀山
島谷山
西谷山
吉野山
金野山
赤野山
大野山
前田山

眞宗大學教授故姫宮大圓師著述

通 俗 五帖壹部御文鼓吹

一名 眞宗安心の龜鑑

總ひらかなつきをなれたるもよめず

定價金貳圓、郵税金貳拾四錢

第三版出來

紙數一千四百頁、四六版 全部六冊 表紙紙入

横井見明師編纂訂正増補二版

目 次	
一帖目	四百五十五ヶ條
二帖目	二百三十二ヶ條
三帖目	百四十四ヶ條
四帖目	二百五十四ヶ條
五帖目	二百四十四ヶ條

村上博士講演集

定價金廿五錢 郵税金四錢

本書は博士村上專精師が、各所に於て演説せられたる筆記なり、博士が該博なる識と壯快なる辯述とを以て、如何に偉大なる感化を世道人心に與へつゝ、あるかは、世既に定論あり、而して本集收むる所十有餘篇、

佛敎の大意、佛敎倫理の要旨、佛敎無我説に付て、禪と念佛、佛敎の過去及將來、歴史上の釋迦佛、宗敎と學術との關係、敎育と宗敎との關係、予が人生觀、廢物利用に就て、人性とは如何なるものか等なり

發行所

京都市油小路 御前通上

興敎書院

東本市本郷 四丁目五番地

文明堂

題字 大谷派新法主臺下 獨立の精神 文學士清澤滿之師 勤行求道徳の解 文學博士南條文雄師 無盡燈社編纂 再版總かなつさ

佛敎之眞精神

定價金十八錢 郵税金四錢

佛の御心佛とは云何なるものか佛は何を興へ給ふか佛の心に叶ひたる人それは云何なる人か、どうして責任を盡すか、親鸞聖人、私共の責任佛の心に叶ひたる家庭まことの父、母子、佛の心に叶ひたる町村國家に對する町村の義務、相互の交際町村の内部に於ける調和佛の心に叶ひたる國家國家は何を目的とせむか、何を基礎とせむか、國民は云何に國を變せむか官吏は云何に下に臨むべきか、外國と云何に交はるべきか、佛の心に叶ひたる世界世界に對する佛の聲をきけ、佛の心を以て現在將來の世界に對せよ、世界は一家なり、人類は同胞なり等

文學士内田融著

モルモン宗

新刊豫告

モルモン宗は海を渡りて米國より來れり、世人は彼を歓迎せんとす、世人は彼を信奉せんとす、世人は彼を果して如何なる教ぞ、彼宗傳道の結果如何、是れ識者の夙に憂ふる所、本書は詳しく彼宗の成立の歴史を尋ね密かに敎義の組織を説き更らに米國政府と彼宗との關係を明かにし、彼宗の現時勢の力の由て起る所の論究せるもの、宗敎家は勿論、世教に志あるもの士は一讀して彼宗の性質を明にかし、再考して對モルモン宗の策を講せよ

東本市本郷 四丁目五番地

文明堂